

た乳癌症例 2336 例を対象とした。両側、重複癌症例は除外した。生存率は他病死を除き Kaplan-Meier 法にて算出し、検定は Logrank 法、Wilcoxon 法により、 $P < 0.05$ を有意差ありと判定した。【結果】遠隔転移を伴わない乳癌 2273 例中、転移リンパ節10個以上の症例は 169 例で、7.4% を占めていた。10年健存率、生存率はそれぞれ 31.1%、38.5% であった。転移リンパ節個数が多いほど M1 症例の含有率が高かった。転移リンパ節10個以上乳癌についていくつかのカテゴリーに分け健存率、生存率につき検討した。(1) 転移個数により細分化 ($n=10\sim 14$, $15\sim 19$, $20\sim 29$, $30\sim$): 有意差は認められなかった。(2) ER・腫瘍径: ER 陰性のもの、3.0 cm を越えるものは有意に予後が悪かった。(3) 術後補助化学療法では、PBST 併用大量化学療法は Anthracycline 系薬剤を用いた標準化学療法に比較し、生存率に有意差を認めないが健存率は有意に良好であった。【結語】転移リンパ節10個以上乳癌では転移個数の多さよりも特に ER など他の因子が予後に関与していると考えられた。転移リンパ節10個以上というカテゴリーは、臨床上当たであり、有用であると考えられた。

2) 術後化学内分泌療法により CR を達し得た StageIV の 2 例

島影 尚弘・黒崎 亮
津田 祐子・草間 昭夫
内田 克之・岡村 直孝 (長岡赤十字病院)
若桑 隆二・田島 健三 (外科)

皮膚浸潤・リンパ節転移を伴う StageIV (骨転移) 例に対し、化学内分泌療法・放射線療法・卵巣摘除術等を施行し、CR を達し得たと考えられる 2 症例を報告する。

症例 1 は術前 StageIIIb で定型的乳房切除術後に CMcF を受けたが、骨シンチにて StageIV が判明し両側卵巣摘出術が行われ、CAF が追加された。以後 TAM と 5'-DFUR にて経過観察された。術後 5 年後に左肺ガン (原発で early stage) を併発し長岡赤十字病院胸外にて左下葉切除術を受ける。術中の胸水細胞診にて乳癌の再発を強く疑われた。TAM, MPA, アフェマにて経過観察するも、CT 検査にて左胸膜播種および右肺に転移を指摘され当科紹介となる。転院後入院にて MAP を内服しタキソール 300 mg/body 投与を 7 クール施行した。CT 検査で左胸膜播種および右肺転移が消失した後、外来にて 2 週間毎にタキソール 110

mg/body を投与し現在観察中で再発兆候は認めない。

症例 2 は定型的乳房切除術後 CAF を施行し、その後に SC-IC-PS 領域に照射し TAM にて経過観察した。しかし CA15-3 が上昇したためフェアストン 120 mg/day を投与しつつ、外来にて CAF を施行したが、CT にて卵巣および肝転移が判明したため両側卵巣切除した後、入院にて MPA 800 mg/day を内服しタキソール 90mg/body 11 クール施行した。5 クール終了時明らかな肝転移は消失した。H11. 8 以降 MPA のみにて経過観察し再発兆候は認めない。

2 症例とも骨転移に対しては骨シンチでは完全な消失は認めないものの、マーカーおよび臨床症状にては完全にコントロールされていると考える。

結語: 乳癌術後の再発に対し、従来投与されていた CAF および内分泌系薬剤も有効であるが、今回 CAF 耐性症例に taxane 系を投与し有効であった StageIV 症例 2 例を経験した。今後再発乳癌に対し CAF に加え taxane 系が有効な治療法となり得ると考えられる。

3) 透析中の再発乳癌に対し CAF 療法を施行した一例

神林智寿子・親松 学 (新潟県立吉田病院)
牧野 成人・田宮 洋一 (外科)

【背景】慢性腎不全患者において血液透析の進歩に伴い延命がはかれるとともに、悪性腫瘍によって化学療法を必要とする機会が増加してきている。しかし透析患者の抗ガン剤の体内動態は不明な点が多く報告例も少ない。

【目的】慢性腎不全で透析中の再発乳癌患者に対する CAF 療法の安全性と有効性を確認する。

【方法】再発乳癌患者 CAF 療法における各薬剤血中濃度の経時的推移を ① 腎不全患者の透析日施行例 ② 正常腎機能患者での施行例、で測定しその結果をふまえた上で ③ 腎不全患者の非透析日施行例で測定した。さらに副作用、抗腫瘍効果について検討した。(腎不全患者 CPA50mg 1 × 隔日, ADM20mg, 5-FU 250 mg. 正常腎機能患者 CPA 100 mg 2 × 連日, ADM20 mg, 5-FU 500 mg.) 【結果】CPA 正常腎機能患者に比し透析患者において透析日、非透析日施行例に関わらず消失時間の遅延は認められなかった。また透析時間前に測定感度以下になった。【ADM】正常腎機能患者と透析患者の透析日 CAF 施行例間では血中濃度の推移に差は認められなかった。透析患者の非透析日

CAF 施行例は検出感度以下になる時間が前 2 者に比し 1.5 倍であった。しかし投与後 4 時間の時点においての血中濃度に差は認めなかった。また透析は ADM 血中濃度にほとんど影響を与えないことが判明した。5-FU 正常腎機能患者の半量投与であるが、透析日、非透析日施行例に関わらず DIV 終了後 1 時間で血中より消失。それは正常腎機能患者も同様であった。【副作用】軽度の脱毛のみ。【抗腫瘍効果】3 クール終了後、肝転移 61% 鎖骨上リンパ節転移 50% 縮小。結語 本症例に対して今回の CAF レジメンは比較的安全に施行可能かつ有効性があることが確認された。

4) 進行再発乳癌に対するタキソテールの使用経験

川原聖佳子・松木 淳
横山 直行・岡田 貴幸
青野 高志・武藤 一朗 (新潟県立中央病院)
長谷川正樹・小山 高宣 (外科)

1997 年 12 月から 2000 年 7 月までに当科で経験した前治療を有する進行再発乳癌症例 15 例 (37~70 歳, 平均 52.9 歳) に対して, タキソテール (ドセタキセル) 60mg/m² を単独で 3~4 週間毎に 1 回点滴静注し, その効果を検討した。副作用のため治療を中止し判定不能であった 1 人を除く 14 例のうち, CR は得られなかったが, PR 6 例, NC 3 例, PD 5 例であり奏効率は 42.9% であった。再発部位別では, 軟部組織 (乳房 100%, 皮膚 100%, 局所・領域リンパ節 50%, 遠隔リンパ節 100%, 縦隔肺門腫瘍 40%), 肺 (42.9%) での奏効率がよく, 以下骨 (25%), 肝臓 (25%) で脳転移には効果は認められなかった。副作用としては Grade 3 以上の白血球減少, 好中球減少を 93.3%, 発熱を 60.0%, 口内炎を 46.7% に認めたがいずれも対症療法により改善した。脱毛は全員に認められ, そのうち全脱毛は 26.7% であった。タキソテールは進行再発乳癌治療において, 特に second line の治療として重要な薬剤の 1 つであると考えられるが, 重篤な副作用も認められ, 少量投与や他剤との併用などさらに検討する必要があると思われる。今後も症例を増やして検討する予定である。

5) 進行・再発乳癌に対するタキソテールの使用経験

小川 洋・藍澤喜久雄
大谷 哲也・片柳 憲雄
山本 睦生・齋藤 英樹 (新潟市民病院)
藍澤 修 (外科)

【目的】タキソテール (DTX) は, 進行・再発乳癌に対する化学療法において最も有効な薬剤として期待されているが, 当院においても 1998 年 4 月より DTX による治療を施行している。DTX の抗腫瘍効果, 副作用について retrospective に検討したので報告する。

【対象】1998 年 4 月より 2000 年 8 月まで DTX による化学療法を受けた 15 例 (進行 5 例・再発 8 例・術後補助療法 2 例) 【方法】DTX の投与方法は 60mg/m² 90 分点滴を 3 週おき, 原則として入院の上投与。副作用などにより 2 回目以降投与量を増減させた症例は認めず。

【結果】15 例の平均年齢は 53.3 歳 (44-71) で全例女性。投与回数中央値は 6 回 (3-15)。CAF などの前治療歴のある症例は 13 例で, それらに耐性を示したのは 10 例 (76%) であった。全例ホルモン療法を併用。転移部位は肝・骨が最も多く 8 例で, 3 臓器以上の転移巣を有した症例は 9 例であった。副作用は, 嘔気・嘔吐が 11 例 (73%), 食思不振が 4 例 (27%), 脱毛が 15 例 (100%), 好中球減少は G1-2 が 7 例 (47%) で G3-4 が 1 例 (7%)。6 例に G-CSF を投与し改善を認めた。抗腫瘍効果判定は 13 例に可能で, CR 2 例 (15%), PR 1 例 (7%), NC 5 例 (38%), PD 5 例 (38%)。奏効率は 23% であった。【考察】CR, PR の 3 例はいずれも CAF 8 クール以上の前治療歴がある症例で, 2 例が進行乳癌, 1 例が再発例であった。転移部位による抗腫瘍効果の差は認めなかった。【結語】DTX は前治療歴のある再発乳癌のみならず, 高度進行乳癌の治療としても有効性が期待でき, 安全に化学療法を施行できると思われる。

6) 進行再発乳癌に対する Weekly Paclitaxel の使用経験

岡部 聡寛・佐野 宗明
田中 乙雄・梨本 篤
土屋 嘉昭・藪崎 裕
瀧井 康公・諸田 哲也
出口 義雄・須田 和敬 (新潟がんセンター)
佐々木壽英 (新潟病院外科)

近年, 乳癌の化学療法として Paclitaxel (PTX) が注目されており, とくに Anthracycline (ADM) や